

正面から
裏庭から見た生家

石薬師に生涯を閉じる決意で明治元年（一八六八）に新居を構えました。

「生家」について触れようと思います。

信綱の父である佐々木弘綱は、全国に名高い歌人・国学者でした。在野において歌道を普及したいという強い思いから石薬師に生涯を閉じる決意で明治元年（一八六八）に新居を構えました。

佐佐木信綱記念館 開館五十年を記念して

佐佐木信綱（一八七二～一九六三）は、



で感心していただけでした。この度記念館の担当をさせていただくにあたり、初めて手に取つたものがあります。顕彰会で作成された『信綱かるた』でした。生涯一万余首を作歌された中で、信綱をよく知る方々が選ばれた五十首とは、また童心に返った気持ちで身近に感じたいという思いで読み始めました。その中から次の一首を引いてみようと思います。

白雲は空に浮かべり谷川の石みな石のおづからなる

白い雲はゆつたりと浮かんでいる。谷川にある、石、石、石。それぞれみなそれが姿をしている。

何気なく捉えられるこの情景は、故郷に想いを馳せた心境だけではなく、今此處に居ることの幸せを噛みしめ、喜びを詠まれたように感じられます。石もひとつひとつ大きさや形が違うなあという部分は、信綱の標語である「ひろく、深く、おのがじしに」に通じていることが強く伝わります。

生涯を通して、人を受け入れ、人との繋がりを大切にされていたこと、人と人との間に生まれる優しさや真心の温かさが伝わ

～Travel without moving～
学芸員のきまぐれコラム

新しい出会い

り、涙が誘われました。「短歌集・『鶯』」にあるこの生涯の名作は、信綱が五十八歳の時に四日市湯の山に滞在の際詠まれた歌であります。

手に取つたものがあるからではないかと考えます。これは無意識を「個人的無意識（個人の人生経験に基づいて作られる無意識）と（普遍的無意識（人類に共通する思考や感情の奥底に潜んだ内なる意識））に分けた考え方ですが、信綱の短歌は後者の「普遍的無意識」が先行して感じられ、その概念をもって個人領域に入り込むという絶妙な焦点深度で「おのがじしに」の精神が表現されている証といえるでしょう。

直接お会いしたことがない小生が厚かましくはあるのですが、白い雲の合間より頬をのぞかせ、「勉強なされまし」という言葉が聞こえてくるようです。

何處に居ても心の旅はできます。一人でも多くの人が、佐佐木信綱の短歌の世界へ「Travel without moving」をしていただけるよう努めてまいります。

参考文献『よくわかる佐佐木信綱先生 春風になろう』（佐佐木信綱顕彰会、二〇一六年）

ご利用案内

三重県鈴鹿市石薬師町に拠点を構える佐佐木信綱記念館は、明治・大正・昭和の時代を生きた歌人・国文学者である佐佐木信綱（1872～1963）の遺功を称えるべく、昭和45年（1970）に鈴鹿市が設置した展示施設です。もとは「信綱生家」を拠点として開館しましたが、昭和61年（1986）に「信綱資料館」が併設されて以降は、こちらを中心に展示活動が行われてきました。資料館と生家の隣には、佐々木家がかつて書庫として使用した「土蔵」や、信綱が還暦を自祝して寄贈した「石薬師文庫閲覧所」なども残されており、これらを一体として佐佐木信綱記念館と称しています。かつての愛用品や、少年期の短冊、ペンネームの由来である名刺、唱歌「夏は来ぬ」の歌詞がしたためられた色紙など、数々の収蔵品を常時展示するほか、毎年秋頃には特別展も開催し、市内外への魅力発信に努めています。



資料館

佐佐木信綱記念館

鈴鹿市石薬師町 1707-3 TEL&FAX 059-374-3140

開館時間 9:00～16:30

休館日 毎週月曜、第3火曜（休日の場合は開館、翌日休館）

年末年始

アクセス 近鉄鈴鹿市駅から C-バス乗車

佐佐木信綱記念館下車徒歩 2 分

東名阪自動車道

鈴鹿 IC から車で約 20 分

※令和3年3月現在、資料館改修工事のため、信綱生家において臨時常設展を行っています。

発行

鈴鹿市文化スポーツ部 文化財課（鈴鹿市神戸一丁目 18-18）

TEL 059-382-9031 FAX 059-382-9071

HP 鈴鹿市文化財ガイド <http://suzuka-bunka.jp/>



優れた学者や歌人に会うため、また花見も兼ねて、当時十一歳の信綱を連れて東

明治十五年（一八八二）、父・弘綱は、和歌の世界に在野の人としてせめて私だけでも残つていなければ、誰が民衆の佳作を選び出し紹介できようぞ。

ところが、明治十年（一八七七）、松坂の門人たちより、衰えつた鈴屋歌会の監督をして立て直して欲しいとの申し出がありました。使命を果たしたら石薬師へ帰つてくるつもりで、同年十二月、生家をそのまま遺して一家は松坂に居を移すこととなりました。

令和元年九月五日から六日未明にかけての豪雨被害により、資料館展示室が使用できなくなりました。令和二年二月から資料室の修繕及び改修工事を実施し、現在は枯らし期間を取りさせていただいております。その間、前号にも記載した通り、令和元年十一月一日から、「生家」主屋に臨時常設展を設置しております。

■臨時常設展開催

参考文献『石薬師のお師匠さま佐々木弘綱翁のおもかげ』『おじいさんの明治維新—祖父—藤田権四郎の生涯』（藤田豊著、平成十三年）

過去特別展を振りかえって

例年、特別展の報告を掲載しておりましたが、今年度は資料館の改修工事に続き、コロナ禍の影響もあり、特別展を開催することができませんでした。この号では、近年（平成二十年度以降）の特別展を図録とともに振り返ります。

■信綱秘書 村田邦夫―師を敬慕し、「鈴鹿もうで」に捧げた半生―（平成二十一年度）

昭和十二年、文芸（詩歌）部門創設「初」の芸術院会員として、斎藤茂吉らと選出されました。その後七十年余りを経て、令孫にあたる幸綱氏が同部門で芸術院会員に選ばれました。芸術院会員に名を連ねた歌人たちを取り上げ、歌集・自筆資料より、信綱や幸綱氏との交流の一端について紹介しました。



師・信綱の故郷に足しげく通われる村田先生のお姿を、人々はいつしか「鈴鹿もうで」と呼び、慕うようになりました。信綱晩年期の秘書で、記念館の企画・運営にはじまり信綱顕彰に半生を捧げられた足跡に焦点をあて、直筆書簡を通して紹介しました。

■芸術院会員の歌人たち―佐佐木信綱から幸綱まで―（平成二十一年度）

昭和十二年、文芸（詩歌）部門創設「初」の芸術院会員として、斎藤茂吉らと選出されました。その後七十年余りを経て、令孫にあたる幸綱氏が同部門で芸術院会員に選ばれました。芸術院会員に名を連ねた歌人たちを取り上げ、歌集・自筆資料より、信綱や幸綱氏との交流の一端について紹介しました。



■信綱と飯田恒治―「機関士の歌」誕生にみる師弟の絆―（平成二十四年度）

飯田恒治氏は国鉄に勤務するかたわら、昭和十九年から同協で竹柏会門人の椿一郎に歌を教わり、その縁で竹柏会に入会。晩年は信綱に直接師事しました。寄贈資料とともに、「機関士の歌」刊行における師弟の結びつき、家族同然の付き合いの中でも深まつていった絆についても取り上げました。



■信綱と雪子――人三脚の文筆活動――（平成二十六年度）

信綱没後五十年目にあたり、郷土石薬師町の各家々に伝わり、大切に受け継がれてきた資料を一堂に展示しました。弘綱の亡き後も、信綱は「日本語いく千千万の中にしてなつかしきかも『ふるさと』いふは」と歌に詠み、故郷を慕つて後年足を運んでいます。親子が郷土に残した足跡を新たに発見するとともに、郷土の人々との交流を紹介します。



■信綱と坂田富美―温情のもとに秘書・門人として―（平成二十一年度）

大正十三年、文芸（詩歌）部門創設「初」の芸術院会員として、斎藤茂吉らと選出されました。その後七十年余りを経て、令孫にあたる幸綱氏が同部門で芸術院会員に選ばれました。芸術院会員に名を連ねた歌人たちを取り上げ、歌集・自筆資料より、信綱や幸綱氏との交流の一端について紹介しました。



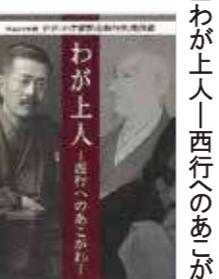
■信綱と「言の葉の道」――誕生から『日本歌学全書』刊行前後――（平成二十二年度）

大正十三年、信綱が西片町（現文京区）に住んでいた頃の秘書の一人でもあり門人でもあった、坂田富美を取り上げ、信綱と富美的交流や交流からうかがえる信綱の人となりや素顔を、写真やエピソードなどで紹介。新たな信綱像を掘り起しました。



■信綱と『心の花』――誕生から『日本歌学全書』刊行前後――（平成二十三年度）

信綱生誕時に弘綱が詠んだ「言の葉の道つたへむとはかなくもわが命さへ祈らるゝかな」の一首を詠み、幼少期から信綱に英才教育をしました。信綱は東京大学での練成期を経て『日本歌学全書』を刊行し、「言の葉の道」への第一歩を踏み出します。信綱の誕生から『日本歌学全書』刊行前後に至るまでの、弘綱・信綱親子の歩んできた「言の葉の道」を紹介しました。



■信綱と『心の花』の歌人たち（平成三十一年度）

信綱が石薬師村に寄贈して文庫の一部や、故郷を詠んだ直筆の短冊、故郷訪問の写真など、約八十点の資料を展示しました。信綱がふるさとに抱き続けた想いを新鮮に、あるいは懐かしく描きだすことで、新たな人物像に触れる機会としました。



■信綱と万葉集（令和元年度）

现存する日本最古の歌集である万葉集を出典とした「令和」時代の始まりの年として万葉集を取り上げます。万葉集の研究に生涯をかけた国文学者としての信綱をたどり、信綱が関わった万葉集研究の中から、『校本万葉集』の編纂、万葉集の外国語訳を中心紹介しました。



信綱一首・35

ふる雪の彌重け吉事ここにして
うたひあげけことほぎの歌

昭和三十三年 信綱八十七歳

新年の初めにあたつて、降り続いている雪のようによいことがあります重なつてくれよと、
ここ因幡国守（島根県）で大伴家持が歌い上げたのである、年賀の歌を。（万葉集最後の歌は
大伴家持）《十一月》今年は大伴家持が因幡守に赴任して一千百年に当る。鳥取市では、國府の
跡、いま県立図書館のある地に歌碑を建てたいと、図書館長山本嘉将君のねもころな依頼があ
つたので、「讃大伴宿禰家持歌」として、この作を書いておくつた。大伴家持をたたえる歌碑
が鳥取県国府跡（鳥取市の因幡万葉歴史館）に建つ。《作家八十二年》より

